

# なつかしの 写真館

おも だに  
面谷鉾山跡  
[和泉村]

九頭竜川の支流、面谷川の中流域に位置する山峡に、かつて面谷鉾山がありました。最盛期には六百世帯、三千人もの人々が暮らしていました。

## 当時の面影を残す鉾山跡

国道158号を岐阜県へ向かって走り、九頭竜湖に架かる箱ヶ瀬橋を渡ります。対岸を右に進み、面谷橋を渡って左折。険しい林道を面谷川沿いに約四 上流に進むと、右手に岩石がむき出しになったような急斜面が現れます。

そこには、廃石が積み上がった「ずり山」や坑道入り口、精錬所跡の石垣が残り、鉾山の痕跡をとどめています。周辺の山々は、精錬の過程で

出る煙の影響なのか、今もあまり草木が育たないようで、赤褐色の山肌を見せています。

## 面谷鉾山の歴史

面谷鉾山の開鉾時期には諸説があり、定かではありません。江戸時代には大野藩が管理し、明治六（一八七三）年に面谷村が所有。同二十二（一八八九）年、三菱合資会社に経営が移りました。

ここでは、銅のほか、銀、鉛を産出。特に銅は品質が良く、電線の「面谷線」として広く知られていました。

## 「穴馬の銀座」

面谷は、三菱合資会社が鉾山を経営していた明治二十二（一八八九）年から大正六（一九一七）年ごろまでが全盛時代でした。

面谷川を利用して自家発電を行い、鉾山の事務所や坑内、社宅には明かりがとまり、電信や電話も早くから開通していました。郵便局をはじめ、学校や図書館、食料品店、料理屋、芝居小屋などもあり、面谷を中心に生活圏ができていました。

昔から穴馬郷と呼ばれる地域に含まれていた面谷は「穴馬の銀座」と呼ばれ、その名にふさわしいにぎわいをみせていました。

## 子孫に伝えられる故郷

海外からの安価な銅の輸入量の増加や銅価格の暴落などにより、大正十一（一九二二）年、面谷鉾山は閉山を余儀なくされました。

面谷で暮らしていた人々は、大野市や遠くは東京、名古屋など各地に離散し面谷は廃村となりました。

今は訪れる人も少ない面谷。

山深いこの地を人々が訪れるのは、鉾山跡から面谷川上流に少し進んだところにひっそりとある墓地だけです。

「毎年、秋分の日近くには、村出身の子孫でつくる『面谷を偲ぶ会』の会員が墓参りをするために集まり、墓地の手入れも行っています」と会員の一人で大野市に住む斉藤文子さん。



大正8年ごろの面谷村（和泉村教育委員会提供）

とり、参加する人は、年々減ってきていますが、できる限り、皆で集まって先祖を供養していきたいです」と話してくれました。

閉山から八十年。先祖を大切に子孫によって、面谷の歴史が後世に伝えられています。



坑道入り口跡



墓地近くに建つ面谷村について記した石碑



山峡に残る面谷鉾山跡